# 宮沢賢治を訪ねて

--北東北　春の旅　3/3--

5/3/2014

北村社会福祉士事務所
代表　北村弘之

4月初めに横浜で桜鑑賞後、今年は桜前線の北上とともに、4 月 22 日から北東北で 2 回目の桜鑑賞ができる旅に出かけました。今回はその旅の最終回、イーハトーブの世界「宮沢賢治」の花巻市と盛岡市の旅です。

あの有名な「雨ニモマケズ　風ニモマケズ　雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ　丈夫ナカラダヲモチ・・・・」は、今回の大震災津波で再び、東北地方の人々の奮起を呼び起こしました。奇しくも、宮沢賢治誕生の年と最期の年にも、三陸大津波があり自然をこよなく愛した宮沢賢治の人生をあらわしているような感じを受けます。

2013 年は没後 80 年。毎年命日の 9 月 21 日には「賢治祭」が多くの人たちの参加で行われているようです。

今回の旅では、花巻市の猫の事務所がある「宮沢賢治記念館」、宮沢賢治学会のある「宮沢賢治イーハトーブ館」、そしてファンタジックな「宮沢賢治童話村」を訪ねました。私は、宮沢賢治に関して、「雨にも負けず」や「銀河鉄道」など作品のことしか知りませんでしたが、今回の旅を通じて、彼のような偉才がどのように世に出てきたのか大変興味を持ちました。賢治記念館で、彼のことを書いた本がないか聞いてみたところ後輩の佐藤降孝氏が書いた本があったので早速読んでみました。

宮沢賢治記念館(花巻市)

どのようにして、このような人が出てきたのか。それは熱心な浄土真宗信者であった親との葛藤、若くして亡くなった妹への想いや彼を取り巻く人々はもちろん、その時代の飢餓や凶作、餓死といった悲惨な背景がありました。もちろん、裕福な家でなければシェロを弾いたり、大量のレコードを買ったりすることはできませんでした。しかし、その裕福さと、一般の人々と触れ合う中で自分の人生観が彼の気持ちを動かしているのではないと思いました。そこに、イーハトーヴのような「ドリームランド」をつくりあげたいとおもったのではないでしょうか。

賢治記念館のレリーフに次のようなものがありました。「宮沢賢治は、岩手県をイーハトブといった。そこはドリームランドで、罪や悲しみでさえよくきれいに輝き、田園の風と光にみちあふれていた。そこは銀河の空間、四次元宇宙のただ中で、そのふしぎな楽しい国土から詩や童話としての心象スケッチが生まれた。」

短い時間を花巻市で過ごしたあと、4 月から「銀河鉄道 SL 号」が走り出した釜石線の乗客となりました。もちろん駅弁は「銀河鉄道 SL 号」です。

翌々日は、宮古市から盛岡市への移動でした。何と、この線は一日に 4 本しかなく、その 1 本の乗客となりました。多くの人はバスで盛岡へ移動(17 本/日)のようでした。盛岡へは雪の溶けた山や畑をみながら 2 時間の旅でしたがのんびりとした風景の中読書と一眠りの時間となりました。ちなみに宮古では、「あまちゃん」で有名になった三陸鉄道は一日 11 本走っていました。

盛岡市では、宮沢賢治の「注文の多い料理店」(1924 刊)を出版された光原社の可否館(コーヒー)でおいしいコヒーをいただきました。現在、この光原社は地元の伝統工芸品等を取り扱っていました。ちなみに、光原社の命名者は宮沢賢治ということです。

盛岡からの帰り、駅の近くで「冷麺」を昼食にいただき帰りました。この冷麺は戦後の復員者が大陸より持ち帰ったもので、ここ 20 年ほどでブームになったようです。わんこそば、じゃじゃ麺と並んで盛岡三大麺となっています。

盛岡市材木町の宮沢賢治

可否館(盛岡市)

北上川の橋から見る早春の岩手山